

創業以来130余年、大成建設は「人がいきいきとする環境を創造する。」を使命に発展を遂げてきた。その高い理念と技術力を支えるのは多士済々のマンパワー。頼もしい10名の精鋭たちの仕事を5回にわたって紹介する。2回目は躍進する若き力に注目。環境に高い意識を持って仕事に向き合う2名に話を聞いた。

環境と建築を考えて コンペ優勝のご褒美

設計本部の藤村淳一氏は「設備グループ」のエンジニアだ。

大型建築になればなるほど、設計の作業も専門職に分かれる。大成建設でいえば、デザインを考え全体をまとめる「建築（意匠）」、最近話題の「構造」、そして空調や照明などを扱う「設備」だ。「設備」の中でも、建物の用途や「電気設備」

と「衛生・空調設備」の分野で分業化されている。藤村氏が担当しているのは「衛生・空調設備」の分野で、主にホテル用途という次第。

「多くの分野に細分化されてきて。新築ホテルの給水・給湯システムの設計や、例えば、夜、空調の音が気になる場合の改善、冷房温度も外国人の方は20度、日本人女性は27度など好みも色々なので、冷暖房が混在出来るシステムを構築します。最近は既存ホテルの空調機能アップの要望が多いのですが、ホテルは24時間365日稼働しているの、リニューアル工事は神経を遣いますね」

建て主の要望を建築設計担当とすり合せながら図面にし、工事が始まれば、現場にもこまめに顔を出して工事の進行を監視し、完成まで導くのが藤村氏の仕事だ。「各段階で問題が頻発するので胃が痛くなるような思いはしょっちゅう(笑)。無理難題が来ると燃えますけどね」

また、藤村氏はホテルの設備設計の他にファサード(建物前面の外装)技術の開発



CADシステムを操る真剣な顔は、一級建築士そのもの。

も携わっている。

「最近ガラス張りの建物が流行ですけど、省エネルギーや環境の観点からは問題も多いんです。そこで、エネルギーを節約しながら、夏涼しく冬暖かい、環境にやさしいガラスのファサード技術を開発しました」

設備の立場で日々省エネルギーやCO₂削減を念頭に奮闘してきた甲斐あって、先頃藤村氏は、建築環境デザインコンペティションの課題案公募で見事優勝。地球温暖化問題を広く一般に喚起する内容が高く評価された。多忙の合間を縫って、この積極的な攻めの姿勢はあっぱれだ。「やる気さえあればこういうコンペの応募も自由に出来るんです。仕事を通して日頃自分が考えていることが認められて、素直に嬉しかったですね。入社前から「コレがやりたい」と具体的な像があったわけではないんですが、会社に入ってから見つけても遅くないと思うんですよ。まだ毎日余裕がなくて常に100%状態で突っ走ってますけど、一流の技術者を目指して力を蓄えていきたいですね」

邁進し続ける若き才能の活躍の場は、まだまだ広がっていきそうだ。



File 004
設計(設備)

File 004 設計(設備)

設計本部
設備グループ
エンジニア

藤村 淳一
Junichi Fujimura

自分の“地図に残る仕事”

入社1年目/M社本社ビル2号棟新築計画に携わる。

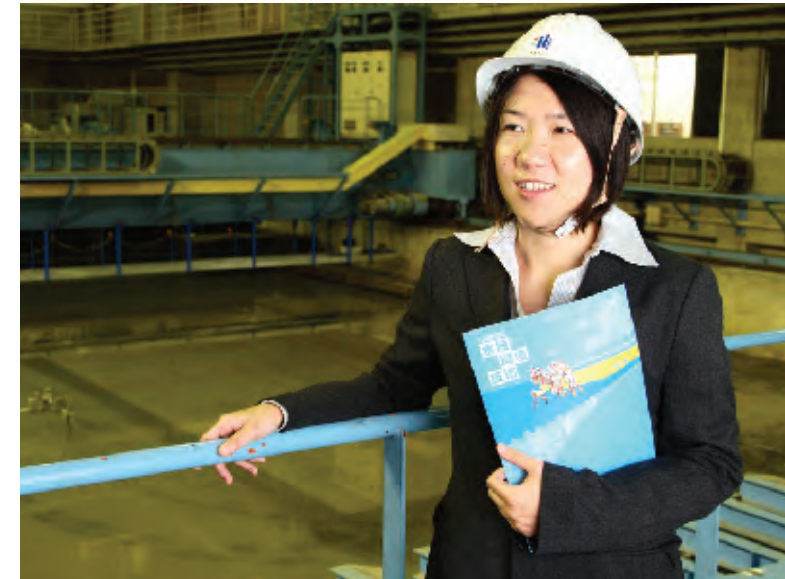
一通りの研修を修了したものの、初めての実施プロジェクトに悪戦苦闘。

入社5年目/目標だった、セントラル空調方式の大型事務所ビル計画に従事。

超短工期のノルマをクリアしつつ、利益率の向上にも貢献。

現在/実施プロジェクトの傍ら、開発したコンパクトダブルスクリーン「T-Facade Air」適用2件目が12月に竣工予定。

大成建設 ② 夢をカタチにする舞台



自然再生を目指して 地道な一歩

建設会社は建造物を造る会社。ビル、ダム、橋、街など。だが「ものを造る」だけでなく「自然環境を考える」研究にも力を入れているのが、大成建設の奥の深さだ。「大成ってそんなこともやってるの?ってよく驚かれますよ」と笑うのは、技術センターの高山百合子氏。水域・生物環境研究室の海洋水理チームに所属し、湿地や干潟などの沿岸域環境を再生する技術開発のための調査や現地実験を行っている。

「私が入社した頃は、自然環境を考えるようなムードは世の中にあまりなかったんですが、ここ数年でかなり関心が高まっ

てきましたね。何か構造物を使って環境に貢献するという考えではなく、本当の自然に戻していくための技術を開発するという発想で研究が始まったんですが、未知の領域だけに本当に手探り状態でした」高山氏が携わっているのが、真珠の養殖で有名な三重県英虞湾の干潟再生事業だ。長年の汚濁負荷で水質が悪化した海に自浄能力を取り戻すために、干潟を造成して生物の棲息状況などを定期的にモニタリング調査している。

「以前から研究のフィールドとして関わりがあった縁で、地元や県の方々と一緒に現地実験を始めることになったんです。実験湖を造るのに県内外の皆さんがボランティアとして参加してくださったり、若手の養殖業者さんたちと一緒に泥をサ

ンプルしたり。そのうち活動が地域に広がって、地元小学校の子供たちとも交流するようになったんですよ」

子供たちが浄化実験の調査対象となるアサリを放流し、環境学習の一環として高山さんが“にわか先生”となって干潟の働きについての授業を行う一幕も。「準備も経験もなかったのもうしろもどろで(笑)。でも、そうやって子供たちや地元の方々との深い絆が出来たのが忘れられませんね。単なる仕事を越えて中身の濃い人生経験をさせてもらいました」

入社前は「海洋=ウォーターフロント開発」という漠然としたイメージしかなかったという高山氏だが、今や自然再生実現への思いは強い。

「仕事でありながら素の自分の感覚も活かせるという、ふたつの視点を持つ分野であることも魅力です。この道をもっと歩き続けてみたいですね」

一語一語かみしめるように話しながら、穏やかな物腰に静かな情熱を秘める高山氏。地道な一歩が、明日の環境を作っていく。



英虞湾の干潟再生事業は、仕事の枠を超えた交流が生まれた。写真提供/大成建設

File 003
土木技術

File 003 土木技術

技術センター土木技術研究所
水域・生物環境研究室
海洋水理チーム

高山 百合子
Yuriko Takayama

自分の“地図に残る仕事”

入社1年目/入社後すぐに、海域環境事業と出会う。

水理実験やシミュレーションが、いつか技術化し、現実となることを夢見てスタート。

入社8年目/自然再生事業が始まる。

小さな実験で始めた干潟再生事業が、7,200m²の規模で英虞湾に実現。

現在/自然再生事業を推し進める。